

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(17)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、3月3日に行われたベルリン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

Berliner Morgenpost

March 6, 2020

Felix Stephan

パーヴォ・ヤルヴィも一人の人間に過ぎず

パーヴォ・ヤルヴィは様々な場所を旅行するのが好きである。国から国へオーケストラを渡り歩く。首席指揮者あるいは常任指揮者として、また芸術顧問として。チューリヒではつい最近チューリヒ・トーンハレ管弦楽団の首席指揮者兼音楽監督に就任し、ブレーメンでは引き続きドイツ・カンマーフィルハーモニー管弦楽団で指揮をとる。東京でも依然として首席指揮者だ。NHK交響楽団でヤルヴィは5回目の公演シーズンを迎える。では、このエストニア出身の指揮者はどのように、これらに並行してベルリン・フィルハーモニー管弦楽団や他の大きなオーケストラでもタクトを振ることができるのだろうか。その問いに対する答えは、ヤルヴィも一人の人間に過ぎないということだ。すべてを成功させることはできない。そのことがNHK交響楽団との本公演で明白だった。

同交響楽団とのヨーロッパ公演は2回目だが、プログラムは武満、ベートーヴェン、ブルックナーで、最終公演の前に訪れたのがベルリンのフィルハーモニーである。特にブルックナーの《交響曲 第7番》は酔いが醒めてしまうような内容だった。空間的広がりや奥行き、深さといったものがない。寧ろ感じられたのは、厳格なコントラバスと若枝のように繊細で高音の弦楽器奏者、鈍重な金管奏者、そして騒々しい木管楽器奏者による、真面目で真剣に打ち込んでいる音楽演奏である。

弦楽器と管楽器との集結がみられない演奏である。その副作用として、多くのディテールがぎこちなく強調されるのに対して、大きな総体との繋がりが感じられない。これに対してベートーヴェンでは、ヤルヴィにとってより身近であることを感じさせる。ベートーヴェン生誕250周年に合わせて、ジョージア出身のピアニストであるカティア・ブニアティシヴィリを伴って、ベートーヴェンの《ピアノ協奏曲 第3番》を演奏した。コントラストに満ちたコンビで

あることが示された。32歳のブニアティシヴィリのピアニッシモ技法は音が殆ど聞き取れない領域まで達する。それに対し日本の演奏者達は引き続きさらりと、そして淡々とした音の抑揚である。これに先立って演奏した武満の《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》の瞑想的な音色と同様だ。オーケストラの主要な役割はピアニストを支え構成を伝えることにある。ブニアティシヴィリはこれを囁いたり、ささやいたり、感情を息づかせる機会に利用していた。